



TITLE:

[特別講演]バルザック文学ここが面白い

AUTHOR(S):

中堂, 恒朗

CITATION:

中堂, 恒朗. [特別講演]バルザック文学ここが面白い. 仏文研究 1997, 28: 117-130

ISSUE DATE:

1997-09-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/137860>

RIGHT:

バルザック文学ここが面白い

中 堂 恒 朗

バルザックの晩年に *Les Comédiens sans le savoir* という1846年に出た中編小説があります。「我知らずコメディアンになった連中」とでも訳しますか、これは一読してファルスのような作品で大したものではありません。主人公の *Gazonal* という50才ぐらいの中年男が2年来、1842年頃からパリにきて、ラングドック地方の自分の毛織物工場の土地問題のことで県との訴訟問題でパリに来ておるんですが、一向に埒があかないんです。ところが母方の親類筋のいここに *Léon de Lora* という画家がイタリア旅行から帰ってきて、その *Gazonal* と出会い、友人の *Bixiou* (ビスイューと僕は呼んでいるんですが、普通ビズィューと濁る人もあるようであります)、このカリカチュリスト、この *Léon de Lora* と *Bixiou* と両方とも絵描きなんですね。この二人が *Gazonal* をパリ案内かたがた彼らの知り合いの所へ連れていき、いろいろの職業の人に会わせるわけです。*Jenny Cadine* という歌うたいのコメディエンヌがいて、*Gazonal* はしまいにこの女優にうつつを抜かし、「私はもう過去のことなんかどうでもよくなった」(*J'en ai eu assez de mon passé.*) と、そういうように叫ぶようになります。ところが、*lettre de change* (為替手形) を取られてすっからかんになってしまうんですが、しかしこれらはみな *Léon* と *Bixiou* のはからいであって、この二人は代議士とか大臣だの、それからそういうお偉いさんはそのほかにもたくさんおるのですが、そういう連中に *Gazonal* を紹介します。またこの *Jenny Cadine* という女優は、*Massol* というのが *Conseil d'État* に属しておる *Maître de Requêtes* という調査官というんですが、これをやっている有力者の *maîtresse* でありまして、この *Massol* は参事院といいますか国務院といいますか、そういう国務院の議長をしきっておりまして、*Gazonal* の訴訟の件が勝訴をもってゆくようにしてやるのであります。*Gazonal* はパリでさんざんからかわれていたようで、彼のためにうまくやってくれていたというのがこの小説のあらすじであります。一向に面白くない小説なんですが、*Gazonal* 以外の登場人物の大半は「人間喜劇」でお馴染みの連中であります。*Rastignac* とか *du Tillet* とかそのほかおなじみの人々がまるでぞろぞろと同窓会のように出てくるといふ小説であります。この小説の題の *Comédiens* というのは複数でありまして、*Comédiens* は南仏の田舎者のブルジョワの中年男を指しておるのではなくて、彼の前に出たりはいったりするさまざまな登場人物ですね、「人間喜劇」のお馴染みのコメディアンたちなのであります。*Gazonal* の案内者の二人もむろんお馴染みの連中でありまして。これは煉獄や地獄を案

内するあのダンテの「神曲」のパロディのようでもあります。Gazonal はいわば新入りのおっさんであります。本来ならこの男がからかわれてわれしらずの喜劇役者になるはずなんですが、実際はそうではなくて、新入りの歓迎会のごとくになっておりまして、からかわれているのはむしろ読者のような気もいたします。なにやら同窓会誌を読むような一向に面白くない小説であります。

ところが私は考え直しまして、はたと気づいたことがあります。このファルスじみた表面の下に、バルザック自身の心の中にわだかまっているもの、暗いトラウマのようなものが隠されていて、バルザックがダンテを気取っていたことがよく分かりました。この Gazonal というのはスペインと国境を接する Pyrénées-Orientales 県の人で、Roussillon-Languedoc 地方出身であります。なお彼のために尽力をした Massol という政治家はカルカッソンの出身であります。この Languedoc 地方というのは、バルザックの先祖のいた地方であります。バルザックの先祖の生まれというのは、Tarn 県の La Nougayrié という村であります。Cazenac 市の近くであります、この辺の最大の町は Albi であります。この辺はバルザックの小説の舞台には全然なっておりません。いわばタブーの地帯なんです。実はこれは、叔父のルイ・バルサ (Louis Balssa) という 1766 年に生まれて 1819 年に死んだ男ですが、この叔父のルイ・バルサの死刑になった事件の地帯だからであります。この叔父のルイ・バルサと言うのは、犯罪事件に関与して 1819 年に死刑になった、そういうバルザックの家としては汚名になっておるのでありまして、バルザック家の人はあまり表に出したくなかったのであります。そういう点で、この辺が全然彼の小説の舞台にはなっていないということが分かって参りました。このルイ・バルサという叔父の事件が明るみに出たのは 1922 年のことであります。バルザックが死んでからだいぶん経っております。Louis Lumet という人が雑誌に発表して、そういうことがあったということを公表したところからそういうことがあったのかとみんながびっくりしたような次第です。バルザック自身が *« Je suis inexplicable pour tous, nul n'a le secret de ma vie et je ne veux le livrer à personne. »* 私は全ての人々にとっては説明しがたい人間だと、誰も私の人生の秘密は知らない、私は、その秘密を誰にも打ち明けたくない、とこういうような文章を 1837 年の 7 月 19 日にハンスカ夫人への手紙に書いているようであります。この秘密がいったい何なのかということは、よく分からなかったのでありまして、クルティウスもこの秘密というテーマでバルザックを扱っておりますが、最近この秘密、このルイ・バルサの秘密が明るみに出てきたのは 20 世紀の後半あたりからであります。バルザックのハンスカ夫人にあてた手紙の文章というのは、このルイ・バルサ事件のことだけではないかもしれないのですが、一家に重くのしかかるこの暗い部分はこの 20 才頃のオノレには大きなショックであったと推測されるのであります。オノレの父親 Bernard-François (1746-1829) は、バルサ家の 11 人の子供たちの長男で、先ほどのルイというのはその末っ子であります。この大量の子供たち 11 人が、全部どのように育ったかということは私は知りませんが、ただ 11 人の子供たちを育てるのはたいへんなことでありまして、農民バルサ家の家計が思いやられる次第であります。問題の殺人事件は 1818 年の夏に起こっております。これは、Cécile Soulié という若い娘が絞殺死体で見つかったわけであります。彼女は妊娠 6 カ月であったそうです。彼女は Jean

Albar という公証人のところで下働きをしておった女性であります。また、ルイ・バルサのところで働いていたようでもあり、そういう、あちらこちらで下働きをしている農民の哀れな女性、という感じの女性です。つまり、2人の男、公証人の Albar と叔父のルイ・バルサが、この身持ちの良くない娘と親しくしていたようであります。ルイがラ・ヌーグリエ村を逃げたというので怪しまれ、そして逮捕されたわけであります。尋問の末、白状したらしいです。これでルイは1年後にギロチンにかけられてしまうわけであります。1819年の8月16日であります。しかしこれはどうも誤審だったようです。真犯人は Jean Albar のほうであって、この公証人が金をやってルイに俺のことは黙ってくれと、頼んだということのようであります。ところで、オノレ・ド・バルザックの父親、Bernard-François は、当時トゥールからパリに出ておりまして、引退間近い役人という、ひとかどのブルジョワ然として暮らしていたわけであります。名前もバルサからバルザックというように変えておるわけであります。この名前を変えたというのは、単なるスノビズムと解する人もおるようではありますが、どうもバルサという名前がこの殺人事件と関係しているので早くこの名前から離れたいという気持ちがあったように、私は思います。オノレの父親の Bernard-François の次の弟に、ジャンというのがあり、その息子、オノレの従弟になる Jean-François というのがありまして、これが公証人をやっていたそうですが、この公証人ジャン・バルザックも、バルサをバルザックという名前に変えていたようであります。ジャン・フランソワ・バルサも、バルサ家の汚名返上のために非常に努力したそうであります。彼は再三にわたって伯父の Bernard-François のために、ルイの事件はどうも無実ではないか、ということで、ルイのためにしきりに援助を頼んだわけだそうです。しかしオノレの父親は、公証人 Albar のところで昔、彼が少年の頃走り使いとして雇われた恩義もあったそうです。そういう恩義のために、気遣いからか、甥の頼みには冷たく応じるのみであったそうです。つまり公証人の Albar の事務所はバルサ家の出世の糸口になったところであります。こういうわけで、ラングドック地帯はオノレの父にとっても、オノレにとっても忘れない、あるいは忘れようとする、しかしなかなか忘れられない、一種のダブルバインドというのでしょうか、二重拘束のある過去と繋がっているようであります。

先ほど紹介しました、*Les Comédiens sans le savoir* にはその暗い影が密かに中にあるんじゃないかと私は気づいたわけであります。Gazonal の姿にはルイ・バルサの無実を訴えるために奔走した従弟の Jean-François の面影があるかもしれない。Léon と Gazonal はいとこ同士なんです。そして Gazonal が勝訴への希望を持つ、これは民事訴訟なんです、これはルイ・バルサへの鎮魂が秘められているのではないかと私は推測したわけあります。そういうように考えますとこの小説は案外深い小説です。こういう、バルザック自身の私生活を持ってきて小説を読むということは邪道のような感じもするんですが、しばしばバルザックの小説は、彼の秘密とその作品とのかかわり合いを知ることによって思いがけない深みを得ることがあって、その点この作品はいかにもバルザックを知る上で非常に重要な、あるいはバルザックの小説のおもしろさというものはこういうところにもあるということを知る上で、私は例にだしてきたわけあります。Mourier という研究家は、バルザックには *une méfiance viscérale pour la justice telle qu'elle est*

という何かその正義と裁判というもに対して、内臓奥深いところから発する疑念・警戒の念があると言っております。そしてさらに、法や契約、結婚契約を含めてですね、そういうものに対して、疑いの念を持っているところがバルザックにあると言っております。バルザックの犯罪とか警察とか、ひいては社会の裏面史への関心が、単にゴシック・ノヴェルやロマン・フィクションからの影響や要請から来ているところもちろんあるのですが、それ以上に私は、彼自身の内面欲求から来ているところが大きいと思います。バルザックでは、必ずしも破邪顕正というか、悪い者が敗れて、正しい者が勝つという風なことは言っておりません。時には邪が勝って正が負け、そういうカタルシスがうまくいっていない小説が時々あるようであります。もっともここには当時ロマン主義とか悪の賛美というものが入っておるかもしれませんが、バルザックには特に、悪というものが実に生き生きと輝いているようであります。時には、犯罪人の方が市民たちより信頼が置けるように書いてあることがあります。警察のやり口は特に蛇のごとく陰湿・陰険で、猿のごとく狡猾であって、それはもう革命時代から、いや旧制度時代からすでに、ずっと一貫して19世紀前半にも共通していることであります。そして時として、信義のほうは犯罪者仲間の方が強く、市民たちは階級変動による不安定とか上昇への野望とか、それに伴う嫉妬心とか競争心、密告、裏切り、反目というものが絶え間なくあるという状態をずっと経験しているわけです。あるいは巨万の富を築き上げたニュシゲンという銀行家の、偽装倒産などによる悪辣な手段で多数の人々が倒産するという合法的犯罪は、それは別に検挙されることはないのです。それに反して、ちょっとした泥棒が蜘蛛の巣に引っかかるという、そういう具合であります。バルザックは、フランス革命時代は、市民そのものが警察であったと言っております。それ以後、テルミドール反動以降は、警察と反警察、*contre-police* と言いますが、とが互いに睨み合い、つまり支配者同士の覇権争いによる警察同士の反目があります。また市民たちは、革命中に市民たちを弾圧しギロチンに送り込んだ連中を、追い立てて殺したり迫害したりしております。ナポレオンはこの事態を一応収拾したのですが、しかし彼も、警察を信用できず、彼独自の反警察を持っております、このことはルイ18世時代にも変わらなかったようであります。こうした警察同士の反目、市民のたれこみ、市民同士の反目、等など世を挙げて人間不信の修羅場であります。そういう趣が、「人間喜劇」が「非人間的喜劇」の様相となります。「非人間的喜劇」は、André Wurmserの言葉です。看板は変わっても、酒は同じだというバルザックがよく引き合いに出している諺です。イデオロギーなどは信用できない、現実には常にかがわしく、胡散臭いとなると、市民もまた警察のごとくであります。バルザックもまたあの眼光の鋭さ、細々と物や人間を問いただす描写、相手の内部に暗い深淵を直感する洞察力、妙に地理に詳しく、裏町の人間の内臓のようにいりくんだ臭気漂う街角をうろつくこと、耳を澄まして聞くこと、追跡しているとともに追跡されているのではないかと恐れる気持ち等等、観察者、詮索好き、情報集め、覗き見(*voyeur*)のバルザックです。これは刑事的あるいは脱走者風のバルザックです。

バルザックの小説ではしばしば刑事と容疑者は相互浸透を起こして、そここのところがつながっているような気がします。これは、Marcel Schwobの短編にあります、つまりお互いの立場が逆転するような心理状態となるんですね。この相互浸透(*osmose*)的状況と言うのはバルザッ

クがよく描くテーマであって、客観的な学者 (savant) がその研究の情熱によって fou となってくる、そしてまた fou なる人が独特の感性でもって学者のようであるという、fou と savant との相互浸透というものをバルザックがよく描いたのであります。これはですね、文明なるもの全てが、こういう自己外化による文化の実現と疎外によって identité 喪失されるという、こういうものがいっしょくたになっているような人間の「労働」によって、成るということであります。疎外と外化が両方してあるという、これはまた後ほど言うと思いますが、こうしてバルザックの世界は chaosmos, これは Dällenbach の言葉ですが、となります。このような支配と被支配とがいつ逆転するか分からないと言う社会では、周縁にいるはずの者が時にこっそりと中心にいたり、中心にいる者がいつのまにやら周縁に排除されていたりする。こういう下克上の現象は、権力のリゾーム構造と言えますが、リゾーム構造というのは最近では権力と離れたところと言われるようですが。バルザックでは、権力そのものにリゾーム構造がある、そういう構造をバルザックは描いていると僕は思います。その原理になっているのは、Principe Argent であります。金銭原理というものが、社会の中心にあります。この金銭原理というものが社会の中心にある限りにおいては、支配者も支配される者もだんだん結びついていきます。そういう構造ですね、中心と周縁がごっちゃになっている、それこそがバルザックが我々に教えるところのものであります。

ここでバルザックの描いた警察官 (policier) のことを若干紹介しておきたいと思います。とくにバルザックの描いた警察官で有名なのは、最初の三人コランタン、コンタンソン、ペイラードです。この三人は忘れられない存在であります。コランタンというのは、かの Fouché これは実在の人物であります、その Fouché の fils naturel となって、バルザックがそのように書いております。バルザックの *Chouans* から晩年の作品に至るまで登場するこの蛇のような執念深い policier であります。ダントンのメトレスだったという Verneuille 嬢にしつこくつきまとっていた男であります。これは『ふくろう党』に出てきて、王党派へのスパイの任務を帯びた Verneuille 嬢を見張っている警官です。コランタンはナポレオン、Louis 18 世の時代、さらに 7 月王政時代にも活躍しており、「人間喜劇」では決して死ぬことのない人物です。ヴォートランも死んではいません。ヴォートランというのは本名 Jacques Collin といいます。一時捕られることもあります、脱走犯人であります。Trompe-la-mort というつまり死神騙しと言うあだ名であります。実はコランタンも先ほど申したように死なない、不死身の気配があり、この二人、コランタンとヴォートランとの格闘、これはバルザックは書かなかったのですが、いつまでも続くような感じで、「人間喜劇」が続くところなのではないかという予感があるような感じがいたします。コランタンはいかに Fouché 然とした男でありまして、性格、風貌がよく Fouché に似ています。ご存じのように Fouché というのは、坊主上がりりの革命家であります。Lyon で大きな粛正をやって「非愛国的活動」を弾圧した男です。それ以後 Fouché は中央政府の中に入り込んだ様なのですが、Robespierre とあわないんですね。Robespierre ににらまれて、巧みに身をかわして Thermidor 反動以後出てくるのです。Barras という男もなかなか抜け目のないおとこでして、Barras は Fouché よりちょっと年上なんです、Fouché の恩人なんです。それと一緒に浮上して来るんです。総裁政府およびナポレオン Bonaparte 支配下にも活躍したわけですね。

Fouché, Barras と言うのは一緒になって活躍しているんですが、最後は Barras が Fouché に裏切られるようですね。Fouché だけがナポレオンにとりたてられるようです。この Fouché という男は非常に情報通 (tuyauté) であって、ナポレオンはこの男を重宝がって警察大臣に採用いたします。ナポレオンはこの男を警戒しつつも (ときにこの男をものすごく怒ったそうですが——これはツヴァイクがよく書いていますがなかなか面白いです——) 手放すことができなかったそうです。ナポレオンがかれ自身の contre-police (反警察) を作ったのはこの Fouché の監視のためだったそうです。なお Fouché とともにナポレオン時代を生きたのは特に Talleyrand と Sieyès で、Fouché とともにフランス革命を、そしてナポレオン時代からさらにそれ以後も生きたのが有名であります。この二人も坊主上がりなんです。三人とも坊主上がりだと言うことが、非常に面白いと思っています。Talleyrand はルイ18世時代にも活躍する外交官であります。Fouché をルイ18世が採用しようとしたが、革命中の régicide, つまりルイ16世の死刑に投票したというので、これがたたって Fouché は追放されたのです。彼はフランスからずっと東ヨーロッパを経て最後にイタリアで死にます。ただ Talleyrand はずっと生きていて、Fouché とは性格が違っていた。この Fouché は資料好きで、情報通の冷静な男なのですが、バルザックにもそういう面があるようです。Talleyrand は直感的な行動家であります。なお Sieyès とする男は、フランス革命の初めに出てきて、また終わりにも出てくるが、そのあいだには出てこない、つまりフランス革命を生き延びた男であります。彼の «J'ai vécu» という言葉は、「俺はフランス革命を生きたんだ」という非常に有名な台詞であります。この第三階級はなにか、と言うところから出発して «J'ai vécu» までたどり着いた坊主上がりの Sieyès を含む、Fouché, Talleyrand ら3人の男ですね、これはバルザックの小説を読む場合には非常に重要な人間像であります。こういう人間像が現実にはいたということを頭の中に置いてバルザックを読んで欲しいと思います。バルザックのお父さんもそういう気配があるんですね。彼もフランス革命を生き抜いた男であります。バルザックは Fouché, Talleyrand と言った連中のことを必ずしも悪くは言っておりません。普通は Fouché を非常に悪く言うものですが、バルザックはこういう蛇のような連中のことを必ずしも悪く言わない。これがちょっと僕には不思議であります。こういう生き抜く策士と言うものにバルザックは捨てがたいものを感じるらしいです。ここにはバルザックが体質として持っているバルサ的、農民的なバイタリティを感じられるとともに、アランが言ったように「バルザックには人間に対する indulgence というものがある」わけですが、スタンダールにはそれがなくて indignation があるわけです。いやな奴は嫌いだというのがスタンダールなのです。バルザックは必ずしもそのようには言わないのです。indulgence は tolérance とは違います。tolérance は上から下をみているのです。そうではないのです。indulgence は「寛容」でありまして「まあ、まあ、」というやつです。アランは、バルザックのこのような態度の方がスタンダールの indignation より恐い redoutable と言っております。バルザックの恐さというものをアランが言っているところは非常に印象に残っております。アランのバルザック論は古いんですが (1937年)。さてコンタンソンとペーラードについて触れておきます。コンタンソンは1760年代に生まれたので、コランタンが1770年代の生まれですから、コンタンソンの方が少し年上なんですね。コラン

タンの方が年上のように僕は思っておったのですが、実際はコンタンソンの方が年上です。もう一人のペーラードというのは1750年代の生まれで、これまたもう一つ年上なんです。三世代の警察官がおるようですが、この中ではペーラードが最も年上です。で、このコンタンソンという警察官の名前は偽名であります。これはバルザックが晩年に書きました『現代史の裏面』の中に登場いたします。それ以外にも出てきますが、はっきりとした名前が出てくるのはこの作品です。これは Bernard-Polydore Bryond des Tours-Minière という長い名前なんですが、単に Bryond (ブリヨン) と呼ばれています。この男はダブル・スパイであります。『現代史の裏面』では、Bryond は Bretagne, Basse-Normandie の反革命・反ナポレオンの王党派の一味に属していたわけです。しかし実際のところ彼は、ナポレオンが放ったスパイであります。そういうことがきづかれないのです。しかもですね、この『現代史の裏面』ではブリヨンには妻がおります。ブリヨンの妻は Henriette Lechantre という熱狂的な王党派で、母親を de la Chanterie 夫人と言います。現金輸送馬車を襲った事件が起こります。これはつまり王党派の現金輸送馬車の強奪事件であります。10万3000フランを奪い取ったそうではありますが、犯人たちは密告によって一網打尽に捕らえられます。密告というのは多分ブリヨンがやったんですね。妻の Henriette は死刑になります。ギロチンの露と消えます。母親の方は22年の刑に処せられます。こういう結末になるのが『現代史の裏面』に描かれている陰惨な事件です。ブリヨンことコンタンソンという警察官は実はナポレオンをも密かに裏切っていた警察官であります。これはナポレオン時代、それ以前からもうそうなのですが、後のルイ18世となるリール伯とも密かに連絡を取っておりまして、立場がどうもはっきりしないのです。コンタンソンことブリヨンという男は、ナポレオン支配の時にはナポレオンについているようですが、彼が没落するときには俺は王党派に寝返ってもいいというような、なかなかのくせ者であります。そういう連中として登場する警察官であります。王政復古末期は、コンタンソンは、ペーラードとともに先ほど申しました犯人のヴォートランを捕らえんとして、コンタンソンことブリヨンは、逃げるヴォートランに屋根から落とされて死んでしまいます。なお、ペーラードは、彼もヴォートランを追いかける警察官ではありますが、ヴォートランの手下のアジー（彼のジャワ生まれの伯母）に毒殺されております。つまり、コンタンソンとペーラードはいずれもヴォートランおよび彼の手下に殺されるわけです。コランタンだけが生き残るわけです。なおこのペーラードという警察官はなかなか英語が得意でありまして、Nabab 然としたイギリスの金持ち紳士に変装することが小説『娼婦盛衰記』の中に出て参ります。このペーラードに Lydie という fille naturelle がおるわけですが、ヴォートランの手下どもによって犯されて気が狂ってしまいます。そういうことも出て参りますがあまり時間がなくて省略いたします。結局このヴォートランは、彼の恋人リュシアン・ド・リュバンプレが捕らえられて牢獄で自殺するんですね。これに対してヴォートランは復讐を誓うんです。他方、コランタンは自分の先輩二人がヴォートランによって殺されたので、ヴォートランへ復讐を誓っておりまして、ヴォートラン対コランタンという対決は結局バルザックは書かなかったわけですが、そういうものが残りそうな感じです。ある意味ではバルザックの大小説群の底流を支配しておりますのは、コランタンとヴォートランであります。蛇と猪との格闘、の暗黒史とも言えるかもしれません。金銭原

理による上層ブルジョワジーの支配の表層の下では、絶えず地盤が揺れ動いています。もっともヴォートラン (Jacques Collin) は恋人の Lucien の死後妙におとなしくなっていて、Police de la Sûreté 保安警察のチーフに取り立てられているようです。彼自身がそういう脱走犯人から一転して警察官の一員になるというのが小説の最後で出て参ります。この保安警察のチーフというのは『ゴリオ爺さん』の最後でヴォートランを逮捕に来る Bibi-Lupin (Gondureau) もそうで実は昔は脱走犯人だったのですが、その後がまにヴォートランが座ることになります。そしてこの保安警察のチーフ・ヴォートランの補佐役になるのが Théodore Calbi というコルシカ生まれのかつてのヴォートランの愛人であります。ご承知のようにヴォートランは同性愛者であります。Théodore Calbi は両刀使いです。コランタンとヴォートランが最後には警察内部の戦いになるかもしれません。こういう小説を読みますと、Police と犯人 (というか泥棒仲間というか、殺人者も含めますが) とのあいだのボーダーラインが曖昧になっております。警察と犯人との区別が曖昧になっている。これは支配の構造の中に支配を一層拡大するために周縁的な人物を密かに取り立てるという権力の構造なのかもしれません。それともこれはバルザック特有の空想世界の権力と犯罪とのメビウスの構造かも知れません。とにかくこの錯覚的現実感が本当かどうか、つまり現実の反映があるかどうかはここでは問わないのですが、バルザックにおいては、権力と非権力との結びつきがあるということです。表面と裏面が結びついているということです。そういう不気味な塊のようなものを感じるということがバルザック小説のおもしろさだと私はおもいます。表に対して裏、という二項対立ではないということです。表裏一体となっている中に真実があるらしいのです。バルザックの真実はいつも歩きにくいもの、暗黒や霧の中をとぼとぼ歩いてゆくのがこのバルザックの真実であります。バルザックは « La Vérité qui va boitant » と言っております。びっこを引きながら歩いてゆく真実と言っております。そう言うような真実はふ厚い暗黒の中に包まれてこそ真実になるのかも分かりません。バルザックでは、明るみに出た真実というのは古い写真を見るようで、色あせて見えるものです。真実というのは隠れていた方がいいというようなそういう真実であります。バルザックは先ほども申しましたとおり voyeur, 覗き見のように他人を仔細に観察し、耳を澄まして聞きます。その眼光は異端審問官のようです。しかもその口はセールスマンのようによくしゃべる。そして Fouché のように情報通なんですね、いろいろと世間のことをよく知っている。ある種の刑事みたいなものです。彼は刑事のごとく他人を追跡するかと思うと、犯人のごとく他人から追跡されることをおびえていたようです。これは Gozlan という人が書いておりますが、「あいつは俺を監視する密偵だよ」と Gozlan に語っております。他人への観察が深くなると、他人の中に自分が引き込まれて、identité が不安定になって、狂気に導かれそうになる。自分と他人との接近ですね、そういうことがバルザックにはよくあります。このことは1836年に生まれた Facino Cane の冒頭部分に若きバルザックらしき「私」という人間が伝えております。覗き見 voyeur が visionnaire といいますか、voyant といいますか、幻視者に転化するということです。他人をじっと見ていると、それに引き込まれて幻想世界の中に引き込まれてゆく、ミイラ取りがミイラになってしまう。これは作家的行為というものであります。バルザックにとっては substitution といいまして、自分が他人と入れ替わる、さらに

prostitution である、売春行為です。これは Baudelaire が言っていることで、彼は芸術を prostitution と言っているわけです。バルザックにもそういうところはあるようです、そういう prostitution だという考えにバルザックは至るわけです。バルザックの世界にその表裏のメビウスの帯があるとすると、彼自身にも自己のメビウスの輪があるのであります。これはバルザックが興奮剤によって幻想への陶醉へと迫ってゆくものではありません。そう考えてはいけません。バルザックは麻薬やタバコ、酒といった興奮剤にきわめて興味を示すことは確かなのですが、ただ、そういうものに非常に警戒もしております。あくまでも彼は Languedoc の Gaulois の農民の子孫であります。よく食べ、よく働き、よく遊ぶという健康体がバルザックの基本であります。コーヒーとバルザックとの関係を神話化しない方がよいと思います。ただ彼はコーヒーをがぶがぶと飲んだだけで、これは必要悪ですね。彼の基本にあるのは労働であります。支配者に対して常に警戒的であります、折あらばおれも権力を持ちたい、そういう夢を見つつ黙々と働く面従腹背的な農民の姿こそバルザックの根にあるものです。これはボードレールやランボーとは違うものです。バルザックにあるのはもっと柄の悪いものです。*Facino Cane* というこの作品は Thomas de Quincey の *English Opium Eater* の告白という1822年の作品で、Musset が仏訳したのをバルザックは読んでいます。これの影響があることは確かです。ただこの de Quinceyの方は麻薬愛用者で、インテリ紳士なんです。かれはロンドンの下町をぶらつく flâneur です。貧困に同情してその中に見いだされる美しい女性に愛情を示しています。そういうことが de Quincey の作品に書いてあります。しかし de Quinceyの方は crank (変人)でありまして pédant なんです。彼の書いた麻薬愛用者の文章というのはバルザックのようにきちとした健全な文章とは違ひまして、私はバルザックと興奮剤との関係に重きを見ないのであります。ただもう少しバルザック文学で別の特徴を述べてみたいと思います。先ほど申したのは、バルザックのメビウスの構造のことですが、裏と表が一緒くたになっている、支配と被支配とが一緒になっている。もう一つは、バルザックという人は、ミイラ取りがミイラになるというテーマをよく書いていますが、他方では、情熱的なものが非常に多いです。ただ、そういう沸騰しているものを冷やしてやろうという、一種のはぐらかしと言いますか、そういう déception (はぐらかし、これは Roland Barthes の言葉ですが)があるということを次に言いたいのです。これは一種のバルザック的 ironie と言いますか、独特のリアリズムであります。バルザックの若い頃の未完の小説に、Walter Scott をまねた *Falturne* というものがありまして、この小説はイタリア人 l'abbé Savonati が原作者であるとバルザックは書いています。これはもちろん架空です。これを仏訳したものを載せたという設定であります。この翻訳をした人は Matricante という instituteur, 小学校教師と訳していいでしょうが、彼がフランス語に翻訳したとバルザックは設定しています。この翻訳者は、全く忠実ではありませんで、その小説の中に介入していくんですね。原作者 l'abbé Savonati を批評するんですね。その批評する言葉のひとつに、「Mange-t-on dans René?」「『ルネ』では人々は食事をしているか?」があります。ルネとはシャトーブリアンの有名な小説であります。Savonati というこの原作者は、登場人物が食事をとっているところを書いており、これを Matricante が誉めていると言う文章がこれなのです。食事のことを書いて

おるのはたいしたものだという *Matricante* の意見、これはバルザックの意見ですね、『ルネ』では人々は食べておるのか」と記して、シャトブリアンを非難しているのですね。つまりロマン派では食事なんて書いていないんですね。バルザックにとっての現代の小説は、食事とか金銭のことです、物のことです。そういう *détails* が大事だとバルザックは言おうとしているのです。ただここでは、バルザックは、本筋とは関係なく、à côté あるいは en note のところにいます。à côté は「横の位置」と言うことですね。en note は「ノートの中で」「注釈で」ということです。この à côté という言い方が非常に面白いんです。この à côté のレアリズムがバルザックに特有なものであります。この à côté という言葉は、1838年の『ニュシンゲン銀行』の末尾に出てくる言葉であります。このニュシンゲンというのは、大金持ちの銀行家であります、彼がどういう人間かということを情報通の4人の男がレストランの個室でべらべら喋っているわけです。この4人の中に先の *Bixiou* がおります。この個室の隣に、私と恋人とがおるという設定になっております。その4人は隣に人がいるということを知らないわけです。社会の裏話を、飲み食いしながら大きな声で喋っているのです。4人の話が終わりかけになる頃、隣の部屋の男女が、恋人同士ですね、帰っていくわけです。「おや、横の部屋に人がいたんだなあ」と4人の一人、ジャーナリストの *Finot* が言うと、「いつも à côté、横には人がいるもんだよ」と *Bixiou* が言うところで小説は終わっています。この à côté というものは常にあるものだ。この à côté というのは、バルザックに特有の非常に面白い表現だと思います。*Facino Cane* でもそうなんですが、ここ『ニュシンゲン銀行』では、書いているバルザックがいて、そして私とメトレスがいて4人の話を聞いており、4人の男が話しているのがニュシンゲンという大金持ちの話をしているわけです。この小説は、à côté 構造が一層徹底しているわけです。バルザック、私とメトレス、4人の男、ニュシンゲンという風に、横へ横へとつながっているわけです。この à côté 構造が非常に徹底してみられるのが『ニュシンゲン銀行』なんです、『谷間の百合』という長大な書簡体小説（私は『川辺の百合』と訳した方が良いと思うんですが）もそうです。バルザックには書簡体小説はむかない、と言っておった人がおりますが、私はどうかな、と思います。書簡体小説は18世紀で終わったと書いていた人がいましたが、僕は必ずしもそうではないと思います。少なくともバルザックは非常に有名な書簡体小説をふたつ書いております。長大な『谷間の百合』は、ナタリーの素気ない返事で終わっています。「あんたみたいな熱狂的な恋愛小説を聞かされるのはいやだ。あんたなんかいやだ」というところで終わっています。これも一種の、先ほどいいましたはぐらかしですね。déception です。いままで一生懸命恋愛の話を読んできたんですが、「アカンペー」と舌を出すような効果があるようです。その他、バルザックの小説では末尾が病気とか、妊娠とか、きわめて生理的なことで終わることがよくあります。非常な熱波がこのように急に冷やされてしまうというのが、バルザックの小説の非常に面白いところであります。この「Mange-t-on dans *René*? », 「人々は『ルネ』で食べておるのか?」という言葉には、一方で *détails* が大事だというレアリズムと、他方でははぐらかしの à côté レアリズム、熱狂を冷ますというレアリズム、バルザック特有のふたつのレアリズムが重なっているように思われます。この点で僕は「Mange-t-on dans *René*?」という言葉が非常に面白いと思っております。この細部

と à côté のレアリスムは、刑事がとる姿勢かもしれないですね。これをまとめて刑事的レアリスムとでも言えるかもしれません。バルザックは *Les Chouans* を書く前に、*Le Gars* という（これはふくろう党のチーフのあだ名ですが）、これを Victor Morillon という仮名で書こうとしたことがあるようです。これは1828年に書かれた、Avertissement（Morillonの序文）が1931年、バルザックが死んでからずいぶん経っていますが、出版されました。この序文の内容をここで検討するわけではないですが、Morillonがこの序文を書いたとバルザックはしています。このMorillonは、publicationはprostitutionだ、出版行為は売春行為だとして、「行け、les filles de mon âme：私の魂の娘たちよ、行け」、ここで娘と訳して良いのでしょうか、私は娼婦と訳した方がよいのではと思うのですが、彼の心の中から生まれるものに呼びかけるところがあります。これは1832年にでました *Théories du conte* という、コントの理論と言いますか、このコントでは作者（コント・ドロラティックの作者バルザック）は mes sosies、つまり私の作人物に対して作者自身が厚い礼を送っているところがなかなか面白く書いてあります。バルザックの作人物は多かれ少なかれ彼の心の中から出た分身なのでありまして、これは Pierre Citron の *Dans Balzac* と言う、この非常に有名な研究書、ここの中で詳しくそういうことが出ております。double、この分身の問題は、その分身になった人物は sosie と言うそっくりさんもおるし、anti-sosie、全くそっくりさんではないという、例えば Lucien という女みたいな男でしょう（とても男前ですが）。これもバルザックの分身なんですね。anti-sosie です。homologue というのは、これはまあ思想と言うか傾向がよく似ておるといえるんですか、そういうバルザック的というか皆バルザックから出ている人物が大勢いっぱいいるということです。例えばヴォートランには sosie 的なところがあり、Lucien には anti-sosie 的なところがあり、そしてこういうところを Schuerewergen という最近のバルザックの研究家が、Balzac contre Balzac と言うように表現しております。バルザック対バルザックと言うことです。敵・見方、あるいは美しいもの醜いもの相乱れてバルザック的分身というものが乱舞する。この世界にはバルザックという異様な肉体、その分泌物のもたらす怪物的な精神構造そのものがあるようであります。

バルザック対バルザックというものの全体、つまりそこにはバルザックなりにあまり美しくないバルザック、非常に美しいバルザック、そういうものが相乱れて怪物のような精神構造を作っている。これもある意味では先ほど言いましたバルザックのメビウスの構造といえるかも知れません。話を進めますが、先ほど言いました Victor Mollion と言う *Gars* の序文を書いた男の Mollion というのは妙な名前であります。これはバルザックのペンネームではなく、フィクションの名前であります。Victor Mollion と言うのは、その序文の中に書いていますが、1788年に Vendômois 地方の小さな町、Mondoubleau（私の分身の意）と言う妙な名前の架空の町で生まれたという風に全く他人事のようにバルザックは書いております。オノレと言う作者は à côté、横におるんですね。前に出てこようとしません。Mollion というのは元々黒い野鴨の意味であって、canard つまり鴨、アヒルの一種であります。つまり canard というガヤガヤというデマ、opinions といいますか、噂といいますか、doxa といいますか、そういうことをも秘めている言葉のようであります。バルザック tuyauté という、先ほど僕が Fouché にかこつけて言ったんですが、

バルザックは非常に情報通で、いろいろな情報を刑事のように知っていおるわけでありまして、canard、このアヒルという言葉は canal という情報の路（これは運河という意味もありますが）にも通じており、これはバルザックの『フィルミアーニ夫人』という1832年の短編で、「真理は歩きにくく世間はガヤガヤと噂にあふれている」と言い、人間の真相はなかなか掴みにくいことを言っております。この表面的 doxa は、真理あるいは真相の居候なんです。実は、真相、真理というものは逆に表面の居候のごとくにもじもじしておるのです。真理というものはヴォルテールやゾラのように堂々と歩いていないんですね。バルザックの真理というのは、いつもこう気兼ねして歩いている。偉そうにあるいているのは情報なんですね。情報が偉そうに歩いている。真実はいつもひがんで歩いている。そういうのがバルザックの構造であります。ここにも真実と情報が一体になっておる、いわばそういうメビウスの構造というものがあろうかと思っております。バルザックは、自分は社会の mœurs を描く secrétaire だと言っています。その秘密を記す書記というわけですね。Morillon という語には黒という意味があり、noire の意味もあります。この noire というのは代作者、コピーの人の意味もあります。ひたすら腰を低くして Walter Scott ばりの歴史を書こうとしているわけでありまして。この Morillon はやがてオノレ・ド・バルザックに成長し、1830年代には妙ちきりんなダンディとしてサロンに往来し、聞き耳を立て、質問し、しゃべりまくり、さらに700フランもだして棍棒のようなステッキ、canne (cane となるとアヒルの雌という意味になりますが) にトルコ石をはめ、握りのところに les Balzac d'Entra(i)gue (バルザック・ダントラグ) の紋章をはめ込んだ、というステッキを持つという話です。この Balzac d'Entra(i)gue に関しましては、Henrie IV の favorite に Henriette de Balzac d'Entraigue というのが有名な人物ですが、バルザックはこれが自分の家系だとうそぶいているわけです。なおナポレオン時代に d'Entraigue という王党派に組みするスパイがいたのですが、この家系は関係があるのかどうか分かりません。このバルザックのステッキは男根のような形をしたもので、当時有名だったようです。バルザックの精力の象徴といっても良いような、特性のステッキでした。これは非常に社交界で評判でして、Delphine de Girardin という、新聞王 Emile de Girardin の奥さんは、*La Canne de Balzac* という小説を書いております。これはSF風の小説で、若い美青年がバルザックの杖を借りて出世するという話であります。このステッキを持つと姿が見えなくなり、情報入り乱れるこの世の真相が手に取る様に分かるという次第で、このステッキは魔法の杖なんです。Girardin とバルザックはしばしば喧嘩するのですが、夫人は夫とバルザックとの仲違いを和解させるためにこの小説を書いたというのが、夫人からの弁解なんです。バルザックはこれに気を悪くしてようです。というのは、バルザックはこの作品に同性愛への暗示を読み取ったのかもしれませんが。自分の同性愛的傾向への当てこすりだと読み取ったのでしょうか。もっともバルザックにはやはり同性愛の傾向もあったようですね。1836年の *Facino Cane* という、主人公の名を持ったこの小説の題名は、魔法の杖という意味にも読めます。これは14世紀後半から15世紀前半に実在した、ピエモンテ出身の傭兵隊長 condottiere の子孫のようにバルザックは書いていますが、実際はこの人物は Venise とは無関係だそうです。だから *Facino Cane* はバルザックの思いつきの名前です。人によっては *Facino Cane* の Cane というの

はバルザックが Tours に住んでいた頃に、隣に住んでいたアイルランド人 Cane ケインの名前から思いついたという人がおります。しかしこの Facino Cane という名全体は fascinating cane のもじりのようにも読めます。つまり魔法の杖と読めるのです。こういう esprit を弄した皮肉もバルザック流のはぐらかしであります。彼の文学世界には現実の情報がこっそりと割り込み、想像と real とが判然としない。このバルザックの世界は我々の現実の世界より chimérique, 怪物的なんです。しかし想像の世界にしては、このバルザックの世界は、我々の世界以上に俗悪, terre à terre なんです。これはブルーストが *Contre Sainte-Beuve* で言っていることです。ブルーストは、サント=プーヴのように作品と作者との関係を密接に考えてはいけないと言っていますが、私は、バルザックの作品は彼の人生と結びつけて考えた方が面白いと思います。

バルザックは若い頃哲学の本を読みふけて、その感想文のようなものを書き残しております。*Œuvres Diverses I, Lectures de Philosophes* (1818-23)にあることですが、バルザックはデカルトの有名な文句、「Je pense, donc je suis.」には納得がいかないようです。これをバルザックが「Je suis, donc je pense.」と言い直しているところが、その感想文に述べられています。デカルトのこの文句、「Je pense, donc je suis.」は、ラテン語の「cogito ergo sum」であることは問題がないのですが、フランス語はちょっと妙だというように私は思っています。で、「Je pense」の「Je」は最初に使っているのにこれを最後に証明するのはどうもおかしいのではないかと、頭が尻尾を噛んでいるというか、バルザックを読んでみると、デカルトをバルザック的に読むとメビウスのような構造を見たくなります。バルザックもデカルトの文章がどうも納得いかない、「Je suis, donc je pense.」とあるようにまず最初にあるのは「Je suis」で、「je」というのは肉体であって、何よりもまず肉体であり、肉体無しでは âme は考えられないという、まず肉体を前提にしないと何もことが始まらないというのがバルザックの考えのようです。デカルトの penser というのは武士のように断乎として肉体を切り放しているというのがデカルト風ですが、バルザックの penser というのは vouloir とか, désirer と言うものに通じていて、当然肉体の欲求も含んでいて、これは当然バルザックの唯物主義と言ってもいいものであります。もっともバルザックにはルソーの影響もあって「考える人は墮落した動物である」と言う文句に、バルザックはこだわるところもありまして、ルソーのように思考を文明の墮落の原因のように考えないようです。思考は、自己をくらくすくすものであり、思考の吸血鬼風の危険性というものにバルザックは気づいているようです。これはバルザックの考えです。バルザックはそこから社会を脱して、思考の不幸をさけて、自然につくというのではなく、自然につくというのがルソー的なものでありますが、人間の文明の想像には常に不幸が伴うものだという、プロメテウスのような考えがバルザックのもののようにあります。ここにはマルクスとヘーゲルとを一緒にしたような疎外というか、外化というか、そういうものが一緒くたにしてあるような感じもいたします。バルザック自身の姿にも、途方もない思考労働の栄光と不吉が読みとれるかもしれません。バルザックの作品というのは、彼の思考労働の、途方もない労働の結果です。バルザックが死んだときには、バルザックの体から臭気が部屋中に充満していたという、そういうことはヴィクトル・ユゴーも書いているところです。

農民バルザック対スノップのバルザック。刑事のような覗き見のバルザック、聞き耳で詮索好きのバルザックと、魔法の煙のように、煙に包まれたようなバルザック。細部にこだわるバルザックと、抽象から統一へと高めようとするバルザック、等々、Balzac contre Balzac といつか、そういうバルザック文学は、彼自身のこう言った内部対立をメビウスの帯といつか輪といつか、そういうものとしてまとめようとする一つのバルザックの放電する魅力を持っていて、その全体は、我々のいる地球のようにそこでは一切のものが互いに関連しているようです。

参考文献

この話を述べるにあたり、一番世話になった比較的新しい文献だけをここにかかげます。

—Roger Pierrot, *Honoré de Balzac*, Fayard, 1994.

—Pierre Citron, *Dans Balzac*, Seuil, 1986.

—Jean Paris, *Balzac*, Ballard, 1986.

—Franc Shuerewergen, *Balzac contre Balzac*, Trinity College, Toronto, 1990.

—Lucien Dällenbach, *La Canne de Balzac*, José Corti, 1996.

—Pierre-François Mourier, *Balzac, L'injustice de la loi*, Michalon, 1996.

—Jean-Louis Bory, *Tout feu, tout flamme*, Union générale d'Éditions, 1960. この中, *Pour Balzac : Balzac et les ténèbres*, pp. 9-121.